



震災後の保育現場が直面する課題とその対応事例に関する調査研究 ～リアルタイムの保育現場への支援をめざして～

大宮勇雄、白石昌子、中村哲也、西内裕一、原野明子(人間・心理学系)
浜島京子、斉藤和代、星 俊子、遊佐早苗、佐藤久美子(附属幼稚園)

I 福島県内の保育の現状と課題

予備的な調査(県内施設で働く卒業生や関係者への聞き取り)によると、福島県内の幼稚園・保育所・保育施設などにおいては、震災後、保育の現場はこれまで経験したことのないさまざまな課題に直面し、その解決に苦慮している。聞き取りによって浮かび上がってきた課題の主なものとして、

- 1) 原発事故による放射能汚染下での保育の質の維持にかかわる悩み・課題
- 2) 被災や震災によって心理的ショックや不安の大きい子どもにどう対応して保育すべきか
- 3) 防災に関すること
- 4) その他
があげられた。

II 本プロジェクトの目的

このプロジェクトの目的は、子どもたちの安全と成長を守り、家族を支え、復興支援に大きな役割を果たしている保育の現場が直面している課題と各園での対応策を掌握すること、第二にそれらを集約・分析して、課題に的確に対応するために必要な情報や対応事例などを現場に伝えることにある。

本報告では、このうち第一の目的である、保育現場が直面している課題を掌握するための一方途として、保育者が抱えている不安を探ることとした。

III 方法

1. 調査対象: 公私立幼稚園(340園)、公私立保育所(304園)の保育者
2. 調査方法: 質問紙調査を施設へ郵送。なお、上記施設数は、アンケート送付時点で休園閉園していない園とした。ただし、警戒区域や計画的避難区域の園については避難先の役場等に送付した。
3. 調査内容: 震災後の保育に関する課題とその対応状況についてのアンケートを送付し、回答者により個別回答してもらった(郵送後納制を利用)。920名からの回答あり。

4. アンケートの構成: アンケートは、①「フェイスシート」(地域と公私立幼保のいずれか、および回答者の職位を問う項目)、②「地震などの防災についての不安」③「原発事故による放射線のこと」④「自分や取り巻く人間関係等のこと」⑤「震災前後で変化があり負担に思うこと」⑥「日々の保育で困っていること」について訪ねた。②～④は下位項目への4段階評定、⑤は該当項目へのチェック、⑥は自由記述を求めた。なお、②～④については、その他不安なこと対応に苦慮していることを自由記述で回答を求めた。

5. 調査時期: 2011年5月中旬～6月末

IV 結果と考察

920名分の回答を、園のある地域を独立変数として分析を行った。なお、園のある地域は、①中通り北部、②中通り中南部、③会津、④浜通り、⑤警戒区域、計画的避難区域、緊急時避難準備区域指定地域、の5つに区分した。具体的市町村名は紙面の都合上割愛する。

1. 震災前後で変化があり負担に思うこと

本報告では、保育者が震災前後で変化があり、負担に思っていることについての結果を述べたい。①の地域では、「先がみえない」「何を信じたらよいかわからない」「保護者の意向の差の調整」「教育課程や保育内容」が他の地域に比べると高い。また、③の地域は、いずれの項目においても他の地域よりも数値が低かった。③の地域の数値の低さは、他の項目の分析においても同様であった。

本調査の実施時期が6月末までということもあり、放射線量の測定や園庭、所庭の土の除去、除染が実施されはじめた頃でもあったことから、地震そのものというより、放射線に対する不安、負担感が大きいと考えられる。保育者自身も何を信じたらよいかわからない、先の見えない不安をもちながらも、保護者間の調整をしながら保育内容・教育課程をどうするか悩む保育者の姿がみえてくる。

2. 今後について

園の取り組みの調査をまとめ、各園に送付し、県下の保育者で問題の共有をはかる一助となればと考えている。

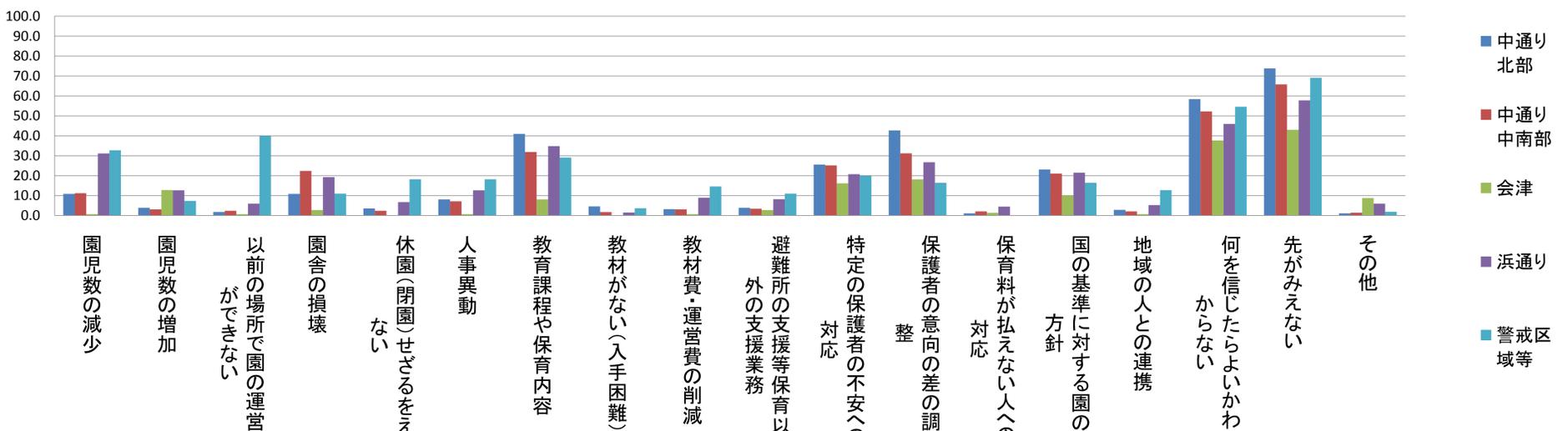


Fig.1 地域別にみた「保育者が震災前後で変化があり負担に感じる事」

【お問い合わせ先】

960-1296 福島市金谷川1 福島大学研究協力課

TEL: 024-548-8009 E-mail: kyoudo@adb.fukushima-u.ac.jp